

巻き寿司で考える文字論



阿辻哲次

文字を研究対象とする者には欧米の言語がどうにもつきあいにくい。ラテン文字やキリル文字では、各文字に固有の意味がないから、AならAをいくら研究しても、それが元来は牛の角の象形文字で……ということくらいで、私などは研究が行きづまってしまう。

しかし文字はそれだけで一人歩きをしてきたわけではなく、どんな文字であっても、いつも人間の文化とともにあった。そのことについて、私は講義でいつも、一本の大きな巻き寿司にたとえて説明する。

まことに奇矯な比喻であるが、いま人間の歴史を、一本の長大な巻き寿司であると考えてみる。それはいったい何メートルあるかわからないほどに長く、これから先もずっと巻き続けられ、いつまでたっても完成することがない。

巻き寿司だから各種の具が巻きこまれているのだが、しかしそれぞれの具が最初から最後まで巻きこまれているとは限らない。途中で切れてしまう具もあれば、多めに使われていたり少量になっていたり、具の分量も場所によってまちまちである。さらに末端にはスモークサーモンやチーズといった、一般の巻き寿司には使われないハイカラな具も使われている。

そんな奇妙な巻き寿司だが、しかしカンピョウはメジャーな具の一つとしてほとんどの部分に使われている。他にも卵焼きやシイタケ、三つ葉などが、時には太く時には細くなりながら、カンピョウと同じように、長大な巻き寿司のほとんどの部分に使われている。

普通の巻き寿司なら、どこで切っても、金太郎飴のように断面が同じような形に見える。しかしこの奇妙な巻き寿司は、左端から5センチの所と15センチの所で切った場合、断面が同じように見えるはずがない。

どの切り口でも、カンピョウやシイタケなどメジャーな具は見えているのだが、しかしカンピョウが他の具とどのようにからまりあっているか、カンピョウと卵焼きのどちらが太いか、あるいは二つが隣り合っているのか離れているのかなど、具と具の関係は切り口ごとに異なっているにちがいない。

さてここまで「カンピョウ」と呼んできた具を「文字」に置きかえてみよう。同じように「三つ葉」を「経済」に、「シイタケ」を「教育」に読みかえよう。他にも「音楽」や「軍事」と読みかえられる各種の具が巻き寿司には巻きこまれていて、それらが各断面ごとに異なった位相で、カンピョウ＝文字とからまりあっている。巻き寿司の終点に近い部分に出てくる「チーズ」はタイプライターを意識しているのであり、「スモークサーモン」は、コンピューターのたとえである。

こう考えてくれば、巻き寿司でたとえた歴史の流れの中で、各時代にそれぞれの文字が、政治や芸術、教育にまつわる言語事象とどのように関係し、存在してきたかを、包丁を入れた時代ごとに見比べることができるのではないだろうか。

これまでおこなわれてきた文字の研究は、ある文字体系がどのように変化発展してきたか、その歴史の変遷を通時代的に考察するものであった。しかしこの方法では文字を使ってきた人間の姿がほとんど見えてこない。それに対し、私が考える「巻き寿司」論なら、文字と人間関係をテンポラリーな次元でとらえていくことができる。それが私の目指す、文字と人間関係の研究で、そこにおいては研究の対象が英語であろうが中国語であろうが、まったく関係ないのである。

(あつじ てつじ・京都大学大学院教授)